

# 菅原智洞著作目録稿

岩 間 智 昭

## 一、はじめに——智洞研究の現在と課題——

菅原智洞は、浄土真宗本願寺派の説教僧、および勸化本作者である。能登羽咋郡菅原村に生まれ、享保（二七一六—一七三六）の頃に上洛したと伝えられる。<sup>(1)</sup>その後、智洞は説教僧として令名を馳せながらも、寛延年間（二七四八—一七五二）から安永年間（二七七二—一七八二）にかけて、多数の勸化本を述作した。

智洞は、近世中期における唱導界の双壁として、真宗大谷派の粟津義圭と併せて語られることが多い。古くは、鷲尾教導氏が、智洞および義圭を「唱導本」作者として、極めて高く評価している。

第二期（※筆者注、宝永元年—享和三年を指す）に入りて本派菅原知洞、大谷派粟津義圭の両名が等身の唱導本を世に出して、唱導を学ぶもの、帰仰をうけたことは唱導史上特筆大書すべきであらう《中略》第三期（※筆者注、文化元年—明治三六年を指す）に入りて著作は寡聞の吾人では餘り多く見無いように思はれる、何にせよ唱導界の本大両派の大関たる菅原智洞と粟津義圭が出た後だから他のものは顔なしである<sup>(2)</sup>

この他、関山和夫氏は、智洞と義圭とを指して「近世真宗説教の最高指導者であつたといつても過言ではない」と述べ、沙加戸弘氏もまた同様の見解を示している。<sup>(3)</sup>

右のように、智洞と義圭とを好一対と見なす論調は多い。しかし、義圭研究に比して、国文学者による智洞研究は、

立ち後れの感が否めない。義圭研究は、関山和夫氏や沙加戸弘氏の論考を始め、後小路薫氏や西田耕三氏、足立賀奈子氏など、国文学者による研究が数多くある。<sup>(3)</sup>一方で、智洞研究については、山内啓介氏や土田衛氏、日下幸男氏によって略年表が作成された他、翻刻や影印本の刊行等が数点なされたのみである。<sup>(7)</sup>

さて、後小路薫氏は、智洞作勸化本『勸化論語』の翻刻に際し、その解説で次のように述べている。

この著者菅原智洞については、近世の勸化本の著者としてよりも、「桂川連理柵」「摂州合邦辻」などの作で著名な、浄瑠璃作者菅専助と同一人物であるか否かをめぐって、芸能史研究の分野でとりあげられ論議のまゝとなっているようである。(土田衛氏「菅専助は説教僧にあらず」京都新聞、昭和五十三年十一月十二日)が、その問題はひとまずおいても、智洞は近世の浄土真宗本願寺派の説教の巨匠として、また勸化本の著者として、注目すべき人物である。私は先に「近世勸化本略年表」(『文藝論叢』第十号、昭和五十三年。本書付録に所収)を作製し、近世の仏教の教化を目的とし

て述作された書籍群のささやかな整理を試み報告したが、そこに掲げた約五百部の書籍のうち二十部を智洞一人がしめている。この一事からも智洞がいかに近世の勸化本史上重要な位置にあるかは明らかであろう。<sup>(8)</sup>

智洞研究の関心は、専ら芸能史研究の方面に向けられていた。その問題はさておき、勸化本を多く述作している点から、智洞は勸化本作者として重要な位置にあることを、後小路薫氏は論じている。

土田衛氏によつて、智洞と菅専助が同一人物であるという説は否定された。生没年の問題等から精緻な研究がなされており、それを覆すことは困難であると言わざるを得ない。これについての論議は、一応の決着を見たと言つてよいだろう。

こうした研究の状況を踏まえた上で、智洞研究を進展させるためには、芸能史研究の分野から距離を置き、後小路薫氏の論じたように、勸化本作者としての智洞に注目する必要がある。「近世の勸化本史上重要な位置にある」とも論じられる智洞の研究が、未だ基盤整備の段階であることは、智洞研究を進展させる上でも、ひいては勸化本研究を

進展させる上でも、解消すべき課題である。

本稿の主たる内容は、智洞研究の基盤整備の一助として作成した、「菅原智洞著作目録」の提示である。併せて、調査の過程で明らかになった、智洞作勸化本を刊行した書肆の傾向にも言及する。

## 二、菅原智洞著作目録

### 【凡例】

○掲載は初版の刊年順（推定含む）とした。

○便宜上通し番号を付した。また、写本は番号の上に

「㊦」を付した。

○旧字体は通行字体に改め、合略仮名を通常の仮名文字に置き換えた。

○調査対象の記載事項には「」を付した。

○複数行に跨る箇所は〈〉で表し、〈〉内の双行箇所は《》で表した。また、改行箇所は「／」で表した。

○虫食いなどによって読解不可能な箇所には「■」を付した。

○本文表記は漢字片仮名交じり（刊本に限り付訓片仮名）で、挿絵を有しない。これらの項目は、目録に掲載した智洞作勸化本全てに共通するため、目録から省略した。

① 浄土勸化言々海 堺市立中央図書館蔵本 [0127・96]

大本・三卷三冊。

【外題】「浄土勸化言々海 上（下）」。原題簽・刷・左

肩・双迎。

【内題】「浄土勸化言々海 卷上（下）」。

【柱刻題】「言々海卷上（下）」。

【序】序題「言々海自序」、序末「芳瑞述」。

【跋】跋題「言々海跋」、跋末「紀南瓊芳題／寛延庚午孟春日」。

【刊記】「文政十年丁亥正月／皇都書林津逮堂 三条通御幸町 大谷 吉野屋仁兵衛板」。

【広告・目録】無し。

【備考】(1) 龍谷大学大宮図書館蔵本 [105.5・152・W] の刊

記には「書林 京堀川通松原上町 八尾清兵衛梓行」と刻されている（刊年未詳）。また、

外題や内題は、右と同一のものを有している。しかし、目録題や柱刻題は、智洞作『浄土勸化文選』(8)のものを有している。

(2) 智洞作『勸導簿照』(10)の「刻勸導簿照縁起」(真教識)に、「ソノ言々海(三／卷)芙蓉編(十／卷)ハ寛延己巳ノ秋、廿二歳ニシテ紀南ニ錫ヲ掛ケ勸導ヲ行シ、還テ帝郷ニ入ルニ、瓊芳ヲ右ニシ芳瑞ヲ左ニシ六条ノ大五堂ニ寄宿シテ冬日ヲ送ルニ、二子ガ為ニ二編ヲ著ス。成コト三月ニハ満ス」と刻されている。これによって、『浄土勸化言々海』は寛延二年(二七四九)、智洞二二歳の時に述作されたものであることが分る。

② 説法百華園 龍谷大学大宮図書館蔵本 [105.5・271・W]  
大本・五卷三冊。

【外題】「説法百華園」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「説法百華園 卷之一(一五)」。

【柱刻題】「百華園卷之一(一五)」。

【序】序題「説法百華園序」、序末「寛延辛未春三月／

菅原山僧智洞如達」。

【跋】無し。

【刊記】無し。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)『享保以後江戸出版書目』によると、初版は宝暦二年(一七五二)に、大坂の柏原屋与市から刊行されたという<sup>(9)</sup>。しかし、その伝存は未詳。

③ 説法魏々編 佛教大学附属図書館蔵天性寺文庫本「天性寺・507」大本・五卷一冊。

【外題】「説法魏々編 全」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「卷一・二」「説法魏々編 卷之一(一・二)」。

「卷三・五」「説法魏々編 卷之三(一五)」。

【柱刻題】「魏々編卷之一(一五)」。

【序】序題「説法魏々編序」、序末「菅原山僧智洞如達撰」。

【跋】跋題「魏々編後」、「周州友人春国識」。

【刊記】○「宝暦貳歳壬申正月人日／書肆／浪華心斎橋筋順慶町 洪川与市／京都堀川通松原上町 八尾清兵衛」(※卷五・二四丁才に刻す)。

○「皇都書林 五条橋通堺町西へ町 澤田文栄堂  
菱屋友五郎」(※後見返しに刻す)。

【廣告・目録】 無し。

【備考】(1)本書は二種の刊記を有する。これらは匡郭の  
大きさを異にしている。卷五刊記の匡郭は、  
縦二〇・三×横一五・〇糎で、後見返し刊記の  
匡郭は、縦一八・四糎×横一三・〇糎である。  
『享保以後江戸出版書目』の記載事項からも、  
本書が菱屋友五郎による後刷本であることは  
明らかである。

(2)龍谷大学大宮図書館蔵本「105.5・269・W」は、五  
卷三冊で、刊者は京の永田調兵衛である。刊  
年は、第三冊卷末に刻される広告「皇都書林  
文昌堂蔵版目録」より、安永六年(一七七七)  
以降と推察される。智洞作勸化本のうち、「勸  
導簿照甘卷」(10・13・15・16)、「勸化論語三  
卷」(11)、「三文一録三卷」(18)の三点が記載  
される。

④ 譬喩願海鈔

龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「105.5

121・W」 大本・五卷一冊。

【外題】「機法／■■」譬喩願海鈔 一」。原題簽・刷・  
左肩・双辺。

【内題】「譬喩願海鈔 卷之一(一五)」。

【柱刻題】「願海鈔卷之一(一五)」。

【序(一)】序題「題譬喩願海鈔後」、序末「宝暦癸酉春正月  
／湖東沙門某識」。

【序(二)】序題「譬喩願海鈔序」、序末「延享二乙丑年二月  
既望／釈善以」。

【序(三)】序題「願海鈔序」、序末「宝暦乙亥仲冬／知洞  
題」。

【跋】 無し。

【刊記】「宝暦三年中春時正日 刻連／四条通寺町西江入  
町 京師 上坂勘兵衛／心斎橋筋順慶町 浪花  
洪川清右衛門／犬上郡千堂町 湖東 田中新治」。

【廣告・目録】「後編 嗣出」(※刊記の丁左側に刻す)。  
【備考】(1)内題左下に、「美濃房島釈善以述／能登菅原  
釈智洞閱」と刻す。

(2)本書の後編が「嗣出」とされる。しかし、詳  
細ならびに伝存未詳。

⑤ 説法無尽蔵 堺市立中央図書館蔵本 [0127・113] 大本・

五卷三冊。

【外題】「第一～二冊」「説法無尽蔵（上（～中）之／本

末」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【第三冊】「説法無尽蔵（下之／卷」。原題簽・

刷・左肩・双辺。

【内題】「第一～二冊」「説法無尽蔵 卷之上（～中）本

（～末」。

【第三冊】「説法無尽蔵 卷之下」。

【柱刻題】「第一冊」「無尽蔵上本（～末」。

【第二冊】「無尽蔵卷中本（～末」。

【第三冊】「説法無尽蔵卷（之）下」。

【序】序題「説法無尽蔵自序」、序末「宝暦癸酉冬十月

菅原山僧智洞如達撰」。

【跋】跋題「無尽蔵」、跋末「京西釈春国書」。

【刊記】「宝暦四歲甲戌仲春日／書肆 京堀川通松原上町

八尾清兵衛梓行」。

【広告・目録】無し。

大本・五卷五冊。

【外題】原題簽欠落。

【内題】「説法微塵章 卷之一（～五」。

【柱刻題】「微塵章卷之一（～五」。

【序】序題「説法微塵章序題」、序末「宝暦五乙亥春二

月能等智洞」。

【跋】無し。

【刊記】「宝暦五乙亥吉日／書林 大坂心齋橋順慶町 河

内屋茂兵衛板」。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)「盈」と墨書された菱形の題簽が、左肩に貼ら

れている。

⑦・a 芙蓉編 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本

[1243・73・W] 大本・三卷二冊。

【外題】「智洞師芙蓉編上（～下」。題簽欠・墨書・左肩。

【内題】「第一冊」「芙蓉編」、「芙蓉卷二」。

【第二冊】「芙蓉編卷三」。

【奥書】無し。

⑥ 説法微塵章 龍谷大学大宮図書館蔵本 [02498・45・W]

【備考】(1)扉に「御文芙蓉編」と有り。

(2)『享保以後大阪出版書籍目録』によると、宝暦六年(一七五六)に、大坂の丹波屋半兵衛より刊行の出願がなされている。<sup>(1)</sup>また、智洞作『勸導簿照』(10)の「刻勸導簿照縁起」(真教識)や(※前掲①②参照、同作『勸詞小室』(14)の序文「寛延己巳ノ冬、予廿有二歳ニシテ、言々海(三ノ巻)、芙蓉編(十ノ巻)、著述シテヨリ」から、本書は寛延二年(一七四九)には既に成立しており、刊本は一〇巻から成っていたことが分かる。しかし、その伝存は未詳。

(3)諸本に、堺市立中央図書館蔵本「0127・92」がある。巻冊数など差異が多く見られるため、特例として次項に書誌を掲載する。なお、その本文には異同が認められる一方、内容はほぼ同一である。

【写7・b 芙蓉編 堺市立中央図書館蔵本「0127・92」大本・一〇巻五冊。

【外題】「第一冊」「一二」。題簽欠・墨書・左肩。

【第二冊】「三四」。題簽欠・墨書・左肩。

【第三冊】「六五」。題簽欠・墨書・左肩。

【第四冊】記載無し。

【第五冊】「九十」。題簽欠・墨書・左肩。

【内題】【第一冊】「芙蓉編卷之一」。

【第二冊】「芙蓉編卷三(一四)」。

【第三冊】「芙蓉編卷之五」、「芙蓉編卷六」。

【第四冊】「芙蓉編第七」、「芙蓉編卷之八」。

【第五冊】「芙蓉編卷之九」。

【奥書】無し。

【広告・目録】無し。

⑧ 浄土勸化文選 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本

「105.5・79・W」 大本・三卷一冊。

【外題】「浄土勸化文選 上 言々海後集」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「浄土勸化文選 卷之上(一下)」。

【柱刻題】「言々後卷上(一下)」。

【序(一)】序題「浄土勸化文選序」、序末「宝暦甲戌冬十二月

月／平安西山春国題」。

【序(二)】序題「与春国師書」、序末「岡鳳鳴書」。

【跋】跋題「跋」、跋末「宝曆乙亥春二月／釈通洞達 兮」。

【刊記】「宝曆辛巳孟春日／書林 京堀川通松原上町 八尾清兵衛梓行」。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)智洞作『勸導簿照』(⑩)の「刻勸導簿照縁起」(真教識)には、本書を指して「言々海ノ後編」と説明されている。龍谷大学大宮図書館蔵『浄土勸化言々海』[105.5・152・W]に見られる、目録題・柱刻題の問題(※前掲①(1)参照)と関係があるものと思われる。

⑨ 式文淘汰鈔 龍谷大学大宮図書館蔵本 [24.93・47・W]  
大本・五卷二冊。

【外題】「式文淘汰■」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「式文淘汰鈔 卷之一(一五)」。

【柱刻題】「報恩講式卷之一(一五)」。

【序】序題「淘汰鈔序」、序末「宝曆壬午正月人日／能登掌持堂自題ス」。

【刊記】「明和三丙戌年八月日出来／書林／大坂心斎橋筋 順慶町 洪川与左衛門／京寺町通松原上ル町 今井七郎兵衛」。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)龍谷大学大宮図書館には、本書の他に二種の刊本が所蔵されている。都合三種の刊本は、それぞれ刊行書肆の記載などを異にしている。

○A本(五卷二冊)……「大坂」洪川与左衛門・「京」今井七郎兵衛……[24.93・47・W]。

○B本(五卷一冊)……「大坂」洪川与左衛門・「大坂」洪川与市……[24.3・622・W]。

○C本(五卷三冊)……「京」丁子屋九郎右衛門……[24.1・33・W]。

A本・B本には、「明和三丙戌年八月日出来」と刻される。しかし、B本がA本よりも、匡郭の縦横が一耗ずつ短くなっている点を勘案すれば、A本を初版(あるいは早印本)と見なすことができる。なお、C本には刊年が刻されていない一方、第二冊裏表紙に「天保七丙申年八月」「伊賀国名張郡蔵持村長倉■西光

寺」と墨書がなされている。

⑩ 勸導簿照 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「105.5、

34・W・1」 大本・五卷一冊。

【外題】「浄／土」勸導簿照卷一〈全部廿冊／初編《自

一／至四》」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「卷一／四」勸導簿照卷一（「四」初編）。

「卷五」勸導簿照卷五 二編」。

【柱刻題】「勸導簿照卷之一（「五」）。

【序（一）】序題「自序」、序末「能登菅原 釈智洞如達

撰」。

【序（二）】序題「刻勸導簿照縁起」、序末「宝曆癸未夏六月

西濃大垣浄円寺真教識ス」。

【跋】無し。

【刊記】「明和三年丙戌正月／京書舗／河南四郎右衛門／八

尾清兵衛／河南四郎兵衛／濃州大垣 本屋善兵

衛」。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)全四編の内、初編。

(2)刊記は、卷四末尾に刻される。

(3)外題と中身に差異が生じている。題簽に刻さ

れる、初編の四冊（卷一／四）のみならず、

二編の第一冊（卷五）が収められている。本

来は一卷一冊綴じであったものを、合本した

際に生じた不都合であろうか。

(4)「自序」には、本書の刊行目的とともに、「イ

サ、カ文義噺事ノ類ヲ編集シテ、黄口ノ雛僧

ノ為ニタ、ソノ言語ヲ誨ルノミ。海内有識ノ

為ニ非ス」と、智洞作勸化本の主たる読者層

を窺い知ることができる。<sup>(12)</sup>

(5)諸本に、龍谷大学大宮図書館蔵本「105.5、274、

W」がある。詳細な書誌は、後掲⑬を参照。

⑪ 勸化論語 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「105.5、

82・W」 大本・三卷一冊。

【外題】「浄土勸化論語 上」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「勸化論語 卷之上（「下」）。

【柱刻題】「論語卷上（「下」）。

【序】序題「勸化論語序」、序末「智洞如達」。

【跋】無し。

【刊記】「明和四丁亥孟春日／平安書林／八尾清兵衛／河南四郎右衛門／同梓」。

【廣告・目録】無し。

【備考】(1)同朋大学仏教文化研究所蔵長円寺寄贈本「長円寺5170」も、同版と思われる。本書は、一卷一冊で、上巻が散佚している。

(2)諸本に、東洋大学図書館蔵哲学堂文庫本「て7左4・T6870」がある。本書の内題は、「慶喜譚 卷之上（下）」となっている。また、本書は次のように、二種の刊記を有する。

【卷末】「明和四丁亥孟春出来／寛政十二庚申秋求版／皇都書林 西六条油小路 魚棚上ル町 三文字屋和助」。

【後見返し】「各宗書籍製本発売所／京都書

林 永田調兵衛 下京区第廿三

組花屋町通油小路東入山川町」。

これらのうち、卷末刊記を参照すると、本書が後刷本であることは明白である。

148・W 大本・四卷一冊。

【外題】「浄土／安心」要言断疑本 一。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「要言断疑本 卷之一（四）」。

【柱刻題】「断疑本卷一（四）」。

【序】序題「要言断疑本序」、序末「通洞」。

【跋】無し。

【刊記】「明和五年戊子春三月穀旦／江戸日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／大坂心斎橋筋安堂寺町 大野木市兵衛／京都堀川高辻下ル町 八尾清兵衛／同堀川仏光寺下ル町 河南四郎右衛門／同 同町 同 四郎兵衛」。

【廣告・目録】菅原智洞著作物（⑩・⑪・⑫）の羅列（※刊記上部に刻す）。

⑬ 勸導簿照 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本 105.5・

34・W・2 大本・五卷一冊。

【外題】「浄／土」勸導簿照卷二（全部廿冊／二編《自五／至十》。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「勸導簿照卷六（十）二編」。

⑫ 要言断疑本 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本 105.5

【柱刻題】「勸導簿照卷之六（～十）」。

【序】無し。

【跋】無し。

【刊記】「明和七庚寅正月／京書舗／河南四郎右衛門／八尾清兵衛／河南喜兵衛／濃州大垣 本屋善兵衛」。

【広告・目録】○「皇都書肆〈英華堂／南榮堂〉藏書品目」

二丁（※巻末に刻す）。

○「智洞師撰述目次」全一一点（※刊記の丁右側に刻す）。

【備考】(1)全四編の内、第二編。

(2)諸本に、龍谷大学大宮図書館蔵本「105.5・274・W」がある。詳細な書誌は、後掲⑬を参照。

⑭ 勸詞小笈 東京大学文学部国語研究室蔵本「11A・10」

大本・三卷三冊。

【外題】「真宗安心勸詞小笈 上（～下）」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「第一～二冊」「勸詞小笈 卷之上（～中）」。

「第三冊」「勸詞小笈 卷下」。

【柱刻題】「勸詞小笈卷上（～下）」。

【序】序末「明和六巳丑夏五月十三日書于京師六条客館」。

【跋】無し。

【刊記】「皇都堀川通仏光寺下ル処 河南四郎右衛門」。

【広告・目録】菅原智洞著作物（⑩・⑪・⑫・⑬）の羅列（※刊記上部に刻す）。

【備考】(1)序文は明和六年（二七六九）のものである。しかし、刊年は不明。広告に「勸導簿照〈全部廿冊／内十冊出来〉」と刻されていることから、『勸導簿照』第二編（⑬）が刊行された明和七年（一七七〇）から、同書第三編（⑮）が刊行された明和九年（二七七二）の間に刊行されたことが推察される。

⑮ 勸導簿照 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「105.5・34・W・3」 大本・五卷一冊。

【外題】「浄／土」勸導簿照卷一 〈全部廿冊／三編《自十一／至十五》〉。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「勸導簿照卷十一（～十五）三編」。

【柱刻題】「勸導簿照卷之十一（～十五）」。

【序】無し。

【跋】無し。

【刊記】「明和九壬辰三月／京書舗／河南四郎右衛門／八尾清兵衛／河南喜兵衛／濃州大垣 本屋善兵衛」。

【広告・目録】「智洞師撰述目次」全一一点（※刊記の丁右側に刻す）。

【備考】(1)全四編の内、第三編。

(2)諸本に、龍谷大学大宮図書館蔵本「105.5・274・W」がある。詳細な書誌は、後掲⑯を参照。

⑯勸導簿照 龍谷大学大宮図書館蔵本「105.5・274・W・4」大本・五卷一冊。

【外題】「浄／土」勸導簿照卷一〈全部廿冊／四編〉自十六／至廿卷」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「勸導簿照卷十六（二十）」。

【柱刻題】「勸導簿照卷之十一（廿）」。

【序】無し。

【跋】無し。

【刊記】○「安永二癸巳五月／京書舗／河南四郎右衛門／八尾清兵衛／河南喜兵衛／濃州大垣 本屋善

兵衛」（※卷二〇末尾に刻す）。

○「文政元年戊寅初冬／皇都書林 御幸町御池下ル町 菱屋孫兵衛」（※後見返しに刻す）。

【広告・目録】○「智洞師撰述目次」全一一点（※卷二〇刊記の丁右側に刻す）。

○「皇都書肆五車樓藏版略書目」五丁（※卷末に刻す）。

○菱屋孫兵衛刊行書籍の羅列、全七点（※後見返し刊記の丁右側に刻す）。

【備考】(1)全四編の内、第四編。

(2)本書は、菱屋孫兵衛による後刷本である。龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「105.5・34・W」は第四編を欠いているため、本書で補完した。

(3)初版の刊記は卷二〇末尾に刻されている。それによると、安永二年（一七七三）に、第二編（⑬）・第三編（⑮）と同一の書肆によって刊行されていることが分かる。しかし、初版の刊記のみ刻された諸本は未見。

(4)『勸導簿照』の現存する諸本は数多く、刊記の

相違に留まらず、合冊の仕方や書形を異にするものもある。<sup>(13)</sup>この点は稿を改めて論じるこ  
ととする。

【写17】 祇園余材 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本 〔105.5  
38・W〕 大本・三卷二冊。

【外題】「祇園余材 上」。原題簽・書・左肩・無辺。

【内題】「第一冊」「祇園余材初編卷之上」。

「第二冊」「祇園余材初編卷之下」、「附録備急用意弁」。

【奥書】無し。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)「附録」の冒頭に「安永三冬十二月十八夜発端  
香光庵智洞」と記載がある。

(2)智洞作『勸詞小筌』(14)の序文(※前掲⑦(2)の  
続き)に、「百華園(五／卷)、巍々編(五／  
卷)、微塵章(五／卷)、無尽藏(五／卷)、式  
文淘汰鈔(五／卷)、勸化文選(三／卷)、勸  
化論語(三／卷)、要言斷疑本(四／卷)、勸  
導簿照(廿／卷)、祇園余材等、明和壬午ノ撰

ニ至ルマテ、数十卷、ミナ浄土勸詞ノ漫書ナ  
ルヲ、海内有識ノ指笑ヲ恥ス」と刻される。  
「明和壬午」は「宝暦壬午」の誤りと思われ、  
本書の成立を宝暦一二年(一七六二)頃と見  
なすことができる。

【18】 三文一録 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本 〔105.5  
55・W〕 大本・三卷三冊。

【外題】「〔隨機／說法〕三文一録八十余座 上(下)」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「三文一録 卷之上(下)」。

【柱刻題】「第一冊」「三文一録卷之上」。

「第二冊」「三文一録卷中」。

「第三冊」「三文一録卷之下」。

【序】序題「三文一録叙言」、叙末「菅原 智洞 敬  
白」。

【跋】跋題「跋」。

【刊記】「安永六丁酉歲孟春／皇都書肆／河南四郎右衛門  
／上坂市兵衛／北村四郎兵衛／小林庄兵衛／山  
田三郎兵衛／八尾清兵衛」。

【廣告・目録】「打起睡眠録三冊 近刻」(※刊記の丁右側に刻す)。

【備考】(1)同朋大学仏教文化研究所蔵水谷氏崇寛文庫本「崇寛<sup>597</sup>」も、同版と思われる。

(2)目録題が次のようになっており、書名にもなっている「三文」の内容が書かれている。

【第一冊】「三文一録卷之上出家文目録」。

【第二冊】「三文一録卷之中優婆夷文目録」。

【第三冊】「三文一録卷之下多屋文目録」。

①<sup>9</sup> 勸向西方編 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本 [105.5  
32・W] 大本・三卷二冊。

【外題】「勸向西方編 一(一)」。原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「勸向西方編 卷之一(一)」。

【柱刻題】「西方編卷一(一)」。

【序】○序題「序言」、序末「安永丁酉夏五月弟子釈青岳謹識」。

○序題「刻勸向西方編序」、序末「安永丁酉之秋九月能州僧通洞達兮書于比良山」。

【跋】無し。

【刊記】「安永七年戊戌二月／書林／京堀川通高辻上ル町近江屋庄右衛門／同寺町通五条上ル町 吉野家為八／同堀川通松原上ル町 八尾清兵衛」。

【廣告・目録】「雜修十三矢ノ辨二編二有 近刻」(※刊記の丁右側に刻す)。

【備考】(1)内題左側に「菅原智洞師口説 門人青岳等筆受」と刻される。

(2)「近刻」とされる書籍の、詳細ならびに伝存未詳。

②<sup>0</sup> 打起睡眠録 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本 [105.5  
115・W] 大本・三卷一冊。

【外題】「打起睡眠録 上」。原題簽・刷・左肩・單辺。

【内題】「打起睡眠録 卷之上(下)」。

【柱刻題】「睡眠録卷之上(下)」。

【序】序題「打起睡眠録自序」、序末「安永三年午十二月既望釈智洞如達敬白」。

【跋】無し。

【刊記】「安永七戊戌六月／京都書林／北村四郎兵衛／河南

四郎兵衛／松浦善兵衛／濃州大垣 本屋善兵衛」。

【広告・目録】「大経勸化遣喚余声 近刻」(※刊記の丁右側に刻す)。

【備考】(1)同朋大学仏教文化研究所蔵水谷氏崇覚文庫本

「崇覚571」も、同版と思われる。本書は、一巻一冊である。

②1 遣喚余声 東洋大学図書館蔵哲学堂文庫本「こ7右17

・T 646」 大本・六卷六冊。

【外題】「大経／説法」遣喚余声 物編 一(一六八)。

原題簽・刷・左肩・双辺。

【内題】「遣喚余声 卷之一(一六八)」。

【柱刻題】「遣喚余声卷之一(一六八)」。

【序】無し。

【跋】無し。

【刊記】「安永十年巳三月／皇都書林／堀川通仏光寺上ル

丁 錢屋庄兵衛／同 仏光寺下ル丁 河南四郎

兵衛／寺町通仏光寺下ル丁 松浦善兵衛／濃州

大垣書林 本屋善兵衛」。

【広告・目録】「二編 近刻」(※刊記の丁右側に刻す)。

【備考】(1)智洞没後の刊行。智洞作『打起睡眠録』(20)

の自序に「座右ノ小子某等ノ需ニ応シテ、コトシ秋九月廿一日ヨリ端ヲ發シテ、大経下巻仏告弥勒章ノ一段ヲ和解シ、遣喚余声ト名ケ、全部十二冊、十二月十日マデニ集録シ畢レリ」と刻されることから、本書は安永三年(一七七四)には成立していたことが分かる。

(2)同朋大学仏教文化研究所蔵水谷氏崇覚文庫本「崇覚551」も、同版と思われる。本書は、六巻一冊である。

(3)本書の第二編(『打起睡眠録』の自序から推察するに卷七一二を指すか)が「近刻」とされる。しかし、伝存未詳。

②2 勸導要語 龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本「105.5

35・W」 大本・三卷三冊。

【外題】「浄土／真宗」勸導要語 上(一一下)。原題簽・

刷・左肩・双辺。

【内題】「勸導要語 卷之一(一三三)」。

【柱刻題】「勸導要語卷之一(一三三)」。

【序】序題「勸導要語序」、序末「安永九年夏六月毘羅山下真龍寺／通洞頓首」。

【跋】無し。

【刊記】「天明元年辛丑孟夏／皇都書肆／寺町通高辻上ル町 松浦善兵衛／堀川通仏光寺下ル町 河南喜兵衛／烏丸通高辻上ル町 同 儀兵衛／御幸町通三条下ル町 同 九兵衛／藤沢伊兵衛」。

【広告・目録】無し。

【備考】(1)智洞没後の刊行。

(2)同朋大学仏教文化研究所蔵水谷氏崇寛文庫本「崇寛560」も、同版と思われる。

### 三、智洞作勸化本刊行書肆一覧

#### 【凡例】

○上段には、刊行書肆を地域別・刊行点数順に並べ、下段には、右目録の通し番号を用いて、その書肆が刊行した智洞作勸化本を記した。

○諸本等を示す場合には、通し番号の下に、該当する諸本等の情報を記した【備考】の数字(1)、(2)、……)

やアルファベットを付した。

○同一の通し番号内で、同一の刊記を有するものは「Ⅱ」で繋げた。

○書肆名の下に刊行点数を示した。なお、「Ⅱ」で繋げたものは一点と計算した。

○目印として、初版(あるいは早印本)には傍線を付した。  
○異なる書肆名や刊年が併存する書籍については、最も後年に刻されたと推察される刊記に限り表に組み込んだ。しかし、⑪(1)については、刊行順の前後関係が明らかでないため、三文字屋和助と永田調兵衛との双方を表に組み込んだ。

【表一】智洞作勸化本刊行書肆対応表

| 刊行書肆             | 智洞作勸化本                                                                       |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 【京】<br>八尾清兵衛〈12〉 | ①(1)   ③(1)   ⑤   ⑧   ⑩  <br>⑪Ⅱ   ⑪(1)   ⑫   ⑬   ⑮   ⑯(3)  <br>⑱Ⅱ   ⑱(1)   ⑲ |
| 河南四郎右衛門〈8〉       | ⑮   ⑯(3)   ⑱Ⅱ   ⑱(1)  <br>⑩   ⑪Ⅱ   ⑪(1)   ⑫   ⑬   ⑭  <br>⑮   ⑯(3)            |

|           |                                  |
|-----------|----------------------------------|
| 河南四郎兵衛〈4〉 | 10   12   20    20   21   21 (2) |
| 河南喜兵衛〈4〉  | 13   15   16 (3)   22    22 (2)  |
| 菱屋孫兵衛〈4〉  | 10 (4)   13 (2)   15 (2)   16    |
| 松浦善兵衛〈3〉  | 20    20 (1)   21    21 (2)      |
| 北村四郎兵衛〈2〉 | 18    18 (1)   20    20 (1)      |
| 永田調兵衛〈2〉  | 3 (2)   11 (2)                   |
| 上坂市兵衛〈1〉  | 18    18 (1)                     |
| 小林庄兵衛〈1〉  | 18    18 (1)                     |
| 山田三郎兵衛〈1〉 | 18    18 (1)                     |
| 錢屋庄兵衛〈1〉  | 21    21 (2)                     |
| 河南儀兵衛〈1〉  | 22    22 (2)                     |
| 河南九兵衛〈1〉  | 22    22 (2)                     |
| 藤沢伊兵衛〈1〉  | 22    22 (2)                     |
| 吉野家仁兵衛〈1〉 | 1                                |
| 菱屋友五郎〈1〉  | 3                                |
| 上坂勘兵衛〈1〉  | 4                                |
| 今井七郎兵衛〈1〉 | 9                                |

|      |              |                                |                                                                    |
|------|--------------|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 〔美濃〕 | 本屋善兵衛〈6〉     | ②①<br>  <br>②①<br>(2)          | ⑩<br> <br>⑬<br> <br>⑮<br> <br>⑯<br>(3)<br> <br>⑳<br>  <br>㉑<br>(1) |
| 〔近江〕 | 田中新治〈1〉      | ④                              |                                                                    |
| 〔江戸〕 | 須原屋茂兵衛〈1〉    | ⑫                              |                                                                    |
|      | 大野木市兵衛〈1〉    | ⑫                              |                                                                    |
|      | 丹波屋半兵衛〈1〉    | ⑦<br>(2)                       |                                                                    |
|      | 河内屋茂兵衛〈1〉    | ⑥                              |                                                                    |
|      | 洪川清右衛門〈1〉    | ④                              |                                                                    |
|      | 洪川与左衛門〈2〉    | ⑨<br>(1)<br>B                  |                                                                    |
| 〔大坂〕 | 柏原屋（洪川）与市〈2〉 | ②<br>(1)<br> <br>⑨<br>(1)<br>B |                                                                    |
|      | 吉野家為八〈1〉     | ⑮                              |                                                                    |
|      | 近江屋庄右衛門〈1〉   | ⑮                              |                                                                    |
|      | 三文字屋和助〈1〉    | ⑪<br>(2)                       |                                                                    |
|      | 丁子屋九郎右衛門〈1〉  | ⑨<br>(1)<br>C                  |                                                                    |

地域別に見ると、刊行書肆数・刊行点数ともに、京が他の地域を圧倒していることが分かる。また、京の中でも、八尾清兵衛が最も多く刊行に携わっており、河南四郎右衛門がそれに続く。さらに、これらの書肆から刊行された智洞作勸化本が、いずれも初版（あるいは早印本）である点の特筆すべきであろう。

八尾清兵衛について、詳細は明らかでない。「新日本古典籍総合データベース」を参照すると、仏書を主とし、その他医書や幼学書を刊行していたことが分かる。河南四郎右衛門については、宗政五十緒氏の研究に詳しい。同氏は、「江戸時代に盛んに活動した店の一つ」として河南四郎右衛門の一門を挙げ、「寛文頃本屋として現われる（あるいは、もう少し遅れるか）。仏書・儒書、また古典の出版で知られた店である」と述べる<sup>1)</sup>。

その一方で、永田調兵衛や、丁子屋九郎右衛門といった、東西両本願寺の、いわゆる御用書林が板元となった事例は少ない。「近世真宗説教の最高指導者」とされる智洞が述作した書籍であるにもかかわらず、初版に至っては一度も刊行に携わっていない点も、特筆すべきであろう。

これにより、智洞作勸化本、とりわけその初版本は、専

門の仏書屋ではなく、仏書を含む多様な書籍を刊行する書肆から刊行されていたことが明らかになった。その理由については、同時代に起こった、「三業惑乱」等の教義論争が関わっていると思われる。しかし、確証は得られていない。

なお、弘前市立弘前図書館蔵「通俗西遊記」<sup>W913.56</sup>「329」後見返しには、「寛政三年辛亥春求版」「皇都書肆錢屋利兵衛」という刊記とともに、「智洞師著述目録」全四点①・③・⑤・⑧が刻されている。しかしながら、錢屋利兵衛の刊記を有するこれら四点の刊本は、伝存未詳である。

#### 四、おわりに

本研究は、国文学サイドにおける智洞研究の基盤整備の一助として、「菅原智洞著作目録」の完成を目指したものである。本稿には、未だ至らない点が多くあるものの、今後の研究の足掛かりとして提示する。

本稿には、「菅原智洞著作目録」と題して、智洞作勸化本二二点の書誌を掲載した。紙幅の都合上、簡易的なものではある。しかし、智洞の旺盛な執筆活動が窺えることも

に、勸化本作者として注目されるべき人物である点を示し得た。

さらに、本稿では目録から刊行書肆の情報を抜き出し、整理した。すると、地域別には京の書肆が他の書肆を数的に圧倒しており、その中でも、八尾清兵衛や河南四郎右衛門の名が、多くの智洞作勸化本に刻されていることが明らかになった。彼らは、専門の仏書屋ではなく、むしろそれに属する永田調兵衛や丁子屋九郎右衛門が、初版の刊行に携わってこなかったことは、留意すべき点である。この理由については定かではないため、今後の研究の課題とした。

### 注

- (1) 井上哲雄氏『真宗本派僧逸伝』（復刻版、永田文昌堂、一九七九年九月）二三五、二三六頁。
- (2) 鷺尾教導氏「真宗唱導史稿」（『六条学報』一五二号、壬寅会、一九一四年六月）一六頁。
- (3) 関山和夫氏『説教の歴史的研究』（法蔵館、一九七三年三

月）三二五頁。

- (4) 沙加戸弘氏「粟津義圭著作目録稿」（『近江地方史研究』第七号、近江地方史研究会、一九七八年六月）。

- (5) 後小路薫氏「義圭著述略考」（『勸化本の研究』和泉書院、二〇一〇年二月）、西田耕三氏「粟津義圭の字訓」（『近世の僧と文学』妙は唯その人に存す）ぺりかん社、二〇一〇年二月）、足立賀奈子氏「近世中後期の講座説教と出版―粟津義圭を一例として―」（『国文学論叢』五六号、龍谷大学国文学会、二〇一一年二月）等。

- (6) 〇山内啓介氏『浄土勸化文選』（勉誠社、一九八一年二月）の「解説」。

〇土田衛氏「菅専助は説教僧にあらず」（『考証元禄歌舞伎―様式と展開―』八木書店、一九九六年六月）。

〇日下幸男氏「菅原智洞の勸化本」（『菅原智洞集』龍谷大学文学部日下研究室、二〇一五年三月）。

これらのうち、日下幸男氏の論考が、智洞と菅専助とが同一人物であるという仮説の下で略年表が作成されているという点は、留意する必要がある。

- (7) 智洞作勸化本のうち、翻刻・影印等がなされたものは、次の通りである。しかし、明治期の翻刻には誤字が多く、智洞研究の基盤としては脆弱なものであると言わざるを得ない。

【翻刻】

○『浄土勸化言々海』『勸化文選』↓『説教集録』（興教書院、一八九二年）収録。

○『勸導簿照』↓『勸導簿照』（『説教学全書』第一編、興教書院、一八九八年）収録。

○『説法百華園』『説法魏々編』『説法無尽蔵』↓『説法百華園・説法魏々編・説法無尽蔵』『説教学全書』第八編、興教書院、一九〇〇年）収録。

○『説法百華園』↓関山和夫氏編『大乘仏典（中国・日本編）第三〇卷（中央公論社、一九八七年九月）収録。

○『勸化論語』↓後小路薫氏『浄土勸化論語』（翻刻）（『勸化本の研究』、和泉書院、二〇一〇年二月）収録。

【影印】

○『浄土勸化文選』↓山内啓介氏編『浄土勸化文選』（勉誠社、一九八一年二月）収録。

○『浄土勸化言々海』『説法魏々編』『浄土勸化論語』↓日下幸男氏『菅原智洞集』（龍谷大学文学部日下研究室、二〇一五年三月）収録。

【覆刻】

○『勸導簿照』↓高羽五郎氏編『勸導簿照』一～四（『真宗談義本小系』第八編、一九八七年三月～一九八八年二月）収録。

(8) 後小路薫氏『浄土勸化論語』（翻刻）（『勸化本の研究』、和泉書院、二〇一〇年二月）五一～四頁。

(9) 樋口秀雄氏・朝倉治彦氏編『享保以後江戸出版書目』（『未刊国文資料別巻』一、未刊国文資料刊行会、一九六二年一二月）。同書には次のように記載される（七八頁）。

説法百華園 全五冊 墨付百十五丁

同二年申正月

作者 女達

板元 大坂柏原屋与市

売出 西村源六

(10) 前掲(9)。同書には次のように記載がある（七八頁）。

説法魏々篇 全五冊 墨付百十二丁

同二年申正月

作者 女達

板元 京八尾清兵衛

売出 須原や茂兵衛

(11) 大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』（大阪図書出版業組合、一九三六年五月）。同書には次のように記載がある（四一頁）。

聖人勸化芙蓉編 五冊

作者 智洞（能登国菅原村）

板元 丹波屋半兵衛

出願 宝暦六年八月

(12) 『勸導薄照』『自序』の全文は次の通りである。

凡ソ勸導ノ体タルヤ、文アリ、義アリ、事アリ、喻アリ。  
喻ハ機変ニ臨応スヘク、事ハ辞典ニ散在スヘシ。義ハ相承  
ノ口訣ニ従ヒ、文ハ脈祖ノ帙中ヨリスルトキハ、詞料ソレ  
乏カラス。シカレトモコレヲ言語ニ発スルニ至テ、ソノ稟  
性ノ異ナル所アツテ、能スルモノアリ、能セサルモノアリ。  
聴衆モマタ各々ソノ異アルカ故ニ、好悪褒貶ソレ一ナラ  
ス。或ハ智ナルアリ、愚ナルアリ。或ハ信者アリ、不信者  
アリ。マタ一念ノ邪ニ止ルアリ、多念ノ執ニ滞ルアリ機々  
区々ニ別レタリ。故ニ言語高雅ナレハ愚者コレニ倦ミ、言  
語鄙俗ナレハ智者コレヲ惡ミ、文義嚴密ナレハ不信者コレ  
ヲ好ンセス。喻事多端ナレハ信者コレヲ褒セス。一念多念  
モマタ爾ナリ。蓋シ信者ハ少ク不信者ハ多ク、智者ハ  
少ク愚者ハ多シ。故ニイサ、カ文義喻事ノ類ヲ編集シテ、  
黄口ノ雛僧ノ為ニタ、ソノ言語ヲ誨ルノミ。海内有識ノ為  
ニ非ス。然レトモコノ言語ニ縁テ毫モ帰仏ノ心ヲ生スルモ  
ノアラハ、ソレ則チ仏力ノ然ラシムル所、余ガ操觚ノ幸ヒ  
何事カコレニシカン云爾。

(13) 例えば、「東京芸術大学附属図書館OPAC」(<http://opac.lib.geidai.ac.jp/opac/>)で検索すると、同館には京の永田調兵衛が刊行した、二〇卷一〇冊揃の諸本「W1885・Ka51」が

所蔵されていることが分かる。しかしながら、本書は二〇一九年五月末時点で、外部機関に保管されていたため、詳細な書誌は取れていない。架蔵本については、別稿にて書誌を掲載する。

(14) 宗政五十緒氏『近世京都出版文化の研究』（同朋舎、一九八二年二月）二四二頁。

【付記】 本目録を作成するにあたり、調査にご協力いただいた龍谷大学大宮図書館、堺市立中央図書館、佛教大学附属図書館、東京大学文学部国語研究室、東洋大学図書館、同朋大学仏教文化研究所に感謝申し上げます。

（本学大学院博士後期課程）